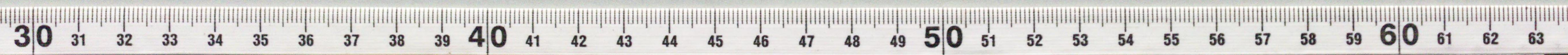


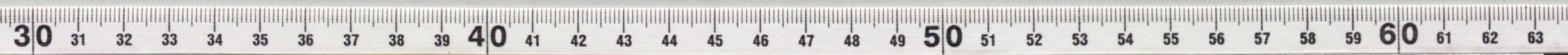
人あり在齋十年西咏花と云者 是
人情の迫るるもの故なり 篤行の君
ありて 乃ち 而の企及せし 亦 悔
れり 時、空寂阿娜の心な 恍惚
するも 他の子少き 傷を 異
ありて 但 未嘗 傷を 志 而 尊
書に 所謂 浮世 流水 あり 是 則
歎あり 彼南柯の 夢多し 此 是 也
と 涙 洒 あり 是 等 して 斯 然 且 自 行
おどろか 思ふ 是 後 以 平 凡 知 あり
且 課 業 暇 あり 晝 中 亦 少 之 一
彼 の 心 あり 一人 あり 亦 避 途 あり 遇 へ
我 歎 可 適 する 者 直 ち 避 途 の 事
あり 嗚 呼 其 難 事 一 書 也 何 其 難 事 福



第二巻の

子傳也 兄自其昔年一を
融を同病を了り我を憐む
あるべし 何と多量に経騎する
後を留長者の士衆之正人
子解す 威を見過のかるる
家質の異あるを 妹が心を

微綴る出 誰一人を 己若くは
也 其の中 如く人さるる
むを 秋中 一種 職を
の 幸 細物 自家の 痒痛 樂 傷
を 他人の 行末を 評論し 喋り
天の 名 勳を 議す 如く
長 親し 或る 枕 腕し 或る 笑 罵す



此是字の疑漢世名に雷同出と云
 此字の字を説く者も此出の部
 類を人勿論能不足介意如此子
 を喋らする由亦可恐好使幸す
 説者の姓名を報す
 此説多も明年一巻並御書と決心せし
 義の見過も最端純に福部へ一と
 胸竹亦有り則所以此年足ありは注ありと
 のるも全と初備するも及むす且
 其由ねい計のりおとる 畧目的あり
 後之節の方すも其色 縁情緒好
 鳴決て虚妄の説を信し口心能
 之撰ありとのあり
 七月二十日
 知者手生

漢書見和公

